

2025年度 異文化理解プログラム（ベトナム） 学生 渡航後レポート

今回、本プログラムへ参加した学生は「参加した目的・学んだこと、挑戦したこと、今後の学生生活・キャリアにどう生かしていくか」を中心に、渡航後レポートを作成しました。

以下の通り、レポートの一部を抜粋して紹介します。

私はこのプログラムに参加するまで、海外経験はなく、外国の人と話した経験も数えるほどしかありませんでした。もともと外国語でのコミュニケーションには強い苦手意識があり、「自分は日本で生きていくのだから海外へ行く必要はない」とさえ考えていました。しかし一方で、私は「たくさんの人と関わること」「人と向き合うこと」を信念としています。それにもかかわらず、関わっている「たくさんの人」が日本人に偏っていることに気づき、自分の視野が属性によって制限されているのではないかと感じました。様々な人と関わることは、新しい価値観や知識に触れることにつながり、自分の世界を広げるはずで、「自分の世界がすべてではない」と実感し、柔軟な考え方を身につけたいと思い、その第一歩として、このプログラムに参加しました。

プログラムを通して特に知りたいと思っていたのは、ベトナムの人にとって日本がどのようなイメージや立ち位置にあるのかという点です。学生との交流の中では、日本のアニメや映画、着物など独自の文化に魅力を感じている人が多く、私自身も世界遺産や美術作品をはじめとした文化をきっかけに他国へ興味を持つため、大きく共感しました。一方で、強く印象に残ったのは、国際交流基金で働くベトナム人の方の「実家の近くに日本企業があり、そこで働きたいと思ったことが日本語学習のきっかけだった」というお話です。一見すると特別な話ではないのかもしれませんが、私にとっては衝撃的で自分の今までの価値観を問い直す話でした。他国への興味が自分や家族の生活に直結しており、その現実的な動機が学習の原動力になっていることに、強いリアリティを感じました。日本が誰かの生活の一部として組み込まれているという事実を知ることができ、自分の価値観が大きく揺さぶられたと感じます。

また、実際の交流の中で最も会話が弾んだのは、アニメやゲームの話題で、現地フィールドワークで一緒に行動した ULIS の学生二人や自分が担当したスピーチコンテストの学生とはこれらの話題を通してかなり仲良くなれてとても嬉しかったです。これまで私はアニメや漫画を「何かに活かせる訳ではないけど自分にとって必要な趣味」くらいの認識で、単なる娯楽だと捉えていましたが、今回の経験を通して、それが異文化交流の大きなきっかけとなり、相手との距離を縮める力を持っていることを実感しました。この経験から、「日本のアニメは世界に誇れる」という言葉を、身をもって体験すると同時に、自分の趣味やこれまで積み重ねてきたことが思わぬ形で生きることを知り、「この世に無駄な経験はないのではないか」と考えることができました。

さらに、相手への興味を持ち、文化を知ろうとする姿勢の大切さも学びました。ベトナムの価値観について質問したり、現地で見かけたものをベトナム語で何というのか聞いたりすることで、自然と会話が生まれました。食べ物の名称や意味が少しわかるだけでも、街の見え方が変わり、行動のハードルが下がることを実感しました。実際に「一人でもいいからもう一度ベトナムに行きたい」と思えるようになり、自分の行動力が確実に高まったと感じています。

挑戦という点では、英語でのコミュニケーションも大きな一歩でした。私はこれまで英語を「読めるけれど話せない」状態で、自分の話す英語に不安があり、正確な英語を話さなければならないと考えてしまって英語を話すハードルが非常に高くなり、会話を避けてきました。しかし、現地では英語を使うしかない状況

2025年度 異文化理解プログラム（ベトナム）

学生 渡航後レポート

に置かれ、実際に使ってみることで成功体験を得ることができました。特に印象に残っているのは、一人で丸亀製麺に行きうどんをテイクアウトできたことです。「Can I take it to go?」と伝えたところ、「Take out?」と理解してもらえ、テイクアウトで通じるという事実とちゃんと自分のスピーキングが通じたという成功体験を得ることができました。この出来事をきっかけに、英語学習への意欲が一気に高まりました。英語が世界で使えることと、完璧でなくてもいい、「やさしい英語」で伝えようとする大切さを、身をもって理解しました。スピーチコンテストの練習も含め、『やさしい』言語の実用性、重要性を実感しました。

以上の経験から、当初の目的であった「価値観を広げること」「一歩踏み出すこと」は十分に達成できたと感じています。そしてこの経験は、帰国後の行動にもつながっています。具体的には、国際必修科目「多文化共生サポーター育成講座A・B」を履修し、日本語ボランティアにも参加することにしました。また、国際交流基金での説明で知った日本語パートナーズについても調べた結果、将来の選択肢の一つとなりました。もともと対人援助職、特に子どもと関わりながら共に学ぶ仕事に興味があった私にとって、この活動はとても魅力的だと感じています。

さらに、スピーチコンテストの指導経験も大きな意味を持ちました。担当した学生の一人が優勝したことも嬉しかったですが、予選で敗退した学生が「日本語でのコミュニケーションに自信がついた。来年も挑戦したい」と話してくれたことが、何より心に残っています。自分の関わりが誰かの学習のモチベーションになり、その人の成長につながるという実感は、今後の自分の進路を考える上でも大きな意味がありました。このプログラムを通して、自分の視野と価値観、そして将来の選択肢が大きく広がりました。人と関わりながら共に成長し、誰かの背中を押せるような仕事に就きたいという思いがより明確になった、非常に有意義な経験でした。

(参加したきっかけ・目的などについて)

私が本プログラムを志望した起点は、法政大学入学前に通っていた専門学校での体験にある。当時、学生の約半数がベトナム人という環境に身を置き、今や彼らなしでは成り立たない社会の現実を目の当たりにした。日々共に学ぶ中で、「なぜ彼らはこれほどまでに熱心に日本を目指すのか」「彼らを突き動かすハングリー精神の源泉は何か」という強い問いを抱いた。彼らの故郷であるベトナムの地に立ち、現地の学生と膝を突き合わせて語り合うことで、その答えを見つけたいと強く願った。

また、過去に参加した日中友好訪中団での経験から、「真の異文化理解は現地を『見る』ことからではなく、現地の人と『対話』することから始まる」という教訓を得ていた。観光や語学留学とは異なり、スピーチコンテストの運営サポートという共通の目標に向かって協働する本プログラムは、深い対話を実践し、国境を越えた信頼関係を築くための理想的な環境であった。

(印象に残っていること・挑戦したことについて)

現地での交流において最も印象深かったのは、ハノイ国家大学外国語大学 (ULIS) の学生たちの流暢な日本語と、底知れぬ熱量である。彼らが日本語で準備したプレゼンテーションは多大な労力が割かれたものであり、高い学習モチベーションを維持し続ける姿勢に尊敬の念を抱いた。

交流の中での私自身の一つの挑戦として、互いに第二言語として学んでいる「中国語」での会話を提案した。拙いながらも同じ外国語を使って意思疎通ができたことは、言語を学ぶ意義とその喜びを肌で感じる感慨深い体験となった。

2025年度 異文化理解プログラム（ベトナム）

学生 渡航後レポート

また、ホー・チ・ミン廟を訪れた際、国民が抱く深い敬意に圧倒されると同時に、現地の学生から「日本の国民的英雄は誰か」と問われ即答できなかつた。この出来事は、他者を知る前にまず自国の歴史やアイデンティティを再考すべきであるという、気付きを与えてくれた。

（学んだことについて）

本プログラムを通じて生じた最も大きな変化は、「国民性」という枠組みで他者を捉えるのではなく、「目の前の個」に真摯に向き合うことの重要性に気づいた点である。

渡航前の私は、「ベトナム人は皆、強いハングリー精神を持っている」という一種のステレオタイプを抱いていた。しかし、騒音の中でも必死に発音練習に励む姿や、自らの経験（教育や人権問題など）をスピーチに組み込もうと、新たな単語を学び続ける凄まじい努力に触れ、考えを改めた。彼らの原動力は「ベトナム人だから」という大きな主語ではなく、「将来〇〇を成し遂げたい」という個人の明確な目標と、日本への深い敬意から生まれていたのである。机上の学習では得られない「五感を通じた実体験」と「個のストーリーへの共感」こそが、異文化理解の土台であると学んだ。

（目的の達成度と今後の学生生活・キャリアへの還元について）

「現地の学生と深い対話を行い、信頼関係を築く」という当初の目的は、想像以上の形で果たすことができた。スピーチコンテストに向けて、計6回のオンライン練習と2回の対面練習で原稿の添削や表現力向上に伴走する中で、言語の壁を越えた強い絆が生まれた。現在も日本語学習や留学の相談に幅広く応じており、今夏には来日する学生を案内する予定である。

本プログラムで得た「相手の背景を傾聴し、伴走する経験」は、将来、多様な背景を持つ人々と協働するキャリアを築く上で、欠かせない対人スキルになると考えている。今後も同様のプログラムに積極的に参加し、大学内における異文化交流の機運を高め、学生同士が個として深く対話できる場作りに貢献することで、この学びを還元していきたい。

私がこのプログラムに参加した目的は主に2つあります。1つ目は、高校時代に様々なバックグラウンドを持つ友人と出会い、価値観の違いに触れた経験から、実際に海外で異なる文化を自分の目で見て学びたいと考えるようになったためです。2つ目は、将来建築家として、発展途上で学校や医療施設、住宅などの設計や建設、インフラ整備等に携わりたいという目標に向け、現地で活動する企業の方々の話を通じ、異文化の中で生じる課題やその向き合い方を学びたいと考えたためです。大学に入学してから、将来海外でキャリアを積みたいと考えているにも関わらず、それを行動に移せていない自分に少し焦りを感じていました。その中でこのプログラムを見つけ、迷うことなく参加することを決心しました。

このプログラムでは、事前オリエンテーションから現地学生とのオンライン交流、スピーチ練習、現地フィールドワークを通して本当に多くの方々と出会い、貴重な経験をさせていただき、大きな学びを得ることが出来ました。特に、コンテスト出場者とのスピーチ練習では、苦手な部分を何度も練習し克服しようと課題に向き合い、「毎晩日本語試験に向けて勉強をしている」「将来日本語を使って仕事がしたい」などと話していた学生の姿がとても印象に残っています。彼らと同様に第二言語を学ぶ学生として、見習うべき点が多くあり、逆に私自身が背中を押されているような感覚になりました。また、ULISの学生と一緒に授業や観光をした際には、国や文化を越えて純粋に学生同士の立場で意見を交換したり、冗談を言い合ったりして仲良くなることができ、心から来て良かったと実感しました。

2025年度 異文化理解プログラム（ベトナム）

学生 渡航後レポート

さらに、在越日本大使館や各企業の訪問では、単に講演を聞くだけでなくコミュニケーションを通して、現地で働く方々の取り組みや異なる文化圏で生じる課題、それに向き合う工夫など、貴重なお話を聞くことが出来ました。その中で、将来海外で働くという自分のキャリアがより具体的に想像でき、今後のモチベーションとなりました。また、ベトナムと日本の関係をより良いものにしようと、言語や文化の壁を越えて第一線で活動する方々に大変感銘を受け、勇気をもらいました。

最後に、意外にもこの経験を通して一番実感したことは、自分自身のアイデンティティ（帰属意識）の存在でした。現地で生活する中で、日本のテレビや食に触れたり、日本人を目にした時に安心感を覚え、こうした感覚が自分の帰属意識と結びついていることに気が付きました。同時に、国や文化に関わらず皆それぞれにアイデンティティがあるのだと実感しました。だからこそ、異なる文化を持つ人々と関わる際に、互いの価値観や背景などから形成されたアイデンティティを理解しようと努め、それらを尊重し合うことの重要性を感じました。こうした相互理解こそが、真の異文化理解に繋がるのではないかと考えました。

もともと留学や異文化に興味があり、その中でも日本語を勉強している学生・日本に興味がある学生と交流できるということが面白そうだなと思い、参加しました。社会主義国という日本とは違う国で生きている同世代の考え方や、海外から見た日本の印象などを聞いてみたいなと思っていました。

本プログラムで一番感じたことは、ベトナムと日本という異なる社会背景を持つ国でも、実際に交流してみたら日本の学生と変わらないなと感じたことです。勝手に、海外の人だから日本人とは違うという壁を作っていたところがあったけれど、実際に学生と話してみることで、その壁がなくなった気がします。朝早く起きるのがつらい、テストがあって勉強が大変のような日常の会話から、将来どんな職業に就きたいかなど、様々な話をしていると考えることや、悩みは日本人と同じで、同じ人間なのだなという実感が湧きました。

また、企業訪問で一番印象に残っていることは、大使館での中島さんのお話です。大使館の様々な仕事のなかでも中島さんは、日本への留学生を増やす取り組みに力を入れているとおっしゃっていました。その理由が、日本に留学してもらい、日本に対して好印象をもってくれた方が自国で政治に関わったときなどに国家間として友好的関係が築けるから、でした。「外交」とはすごく大きい規模で行われており、私たちが関与できるものではないと考えていたけれど、このお話を聞いて、私たちにも関わることがあるのだなと、少し身近に感じることができて、とても興味深かったです。

今回のプログラムを経て、言語の勉強により力を入れていきたいなと思いました。ベトナムの学生が日本語を勉強して一生懸命話してくれていると、日本のことが好きなのだなと、すごく嬉しくなりました。言語を学ぶとその国の人と話すことができるだけでなく、友達になることが、より深くかかわることができるのだなと学びました。また、世界中に友達を作ることができることはすごく自分の財産になるし、楽しいことだなと思いました。

今回ベトナム異文化交流プログラムに参加したのは、英語力に自信がなく、海外で学ぶということに対して苦手意識を持っていましたが、日本語での参加が可能ということで、異文化の中に実際に身を置いて学習するという、諦めかけていたことを実現できるかもしれないと感じたことがきっかけです。また、4月には大学3年生となり、自分の将来やキャリアについても考えていかなければいけない時期となり、自分自身の将来の可能性を広げる機会になればいいなと思い参加をしました。実際に、現地の日本語学習者と交流していく中で、

2025 年度 異文化理解プログラム (ベトナム)

学生 渡航後レポート

「完璧な言語で伝えるよりも、まずは伝えるという姿勢が大事」ということを実感しました。最初はコミュニケーションがとれるか心配でしたが、簡単な言葉やジェスチャーを交えてコミュニケーションをとって行く中で、相手に伝わるように話すことの難しさや、伝わったときの嬉しさ、面白さを感じました。初めての海外生活で、体調を崩すこともありましたが、ベトナムの病院に行くという普通ではあまり味わえない経験ができた事も印象に残っています。さらに、日本とは異なる価値観に触れ、自分の中の「当たり前」の考え方が変わりました。今回の経験から、今後は、このような新しい環境に飛び込んでみる、という気持ちを忘れずに、様々なことに挑戦していきたいです。

(本プログラムに参加したきっかけや学びたいと思ったことについて)

今まで海外に行ってみたいと思っていましたが、英語力に自信がなく海外に行くことに躊躇っていました。そんな時に英語力が必要なく、異文化プログラムに行くことができると知り申し込みました。日本語を勉強しているベトナム人学生の勉強意欲はどこから来ているのか、日本と同じ縦長の土地で南北の文化などの違いはあるのか、海外で活躍している日本人はなぜベトナムで働こうと思ったのか、ベトナム（海外）で働くことの良い点は何かを学びたいと考えていました。

(学んだこと、挑戦したこと等について)

現地の大学生に日本の好きなところやイメージを聞くとアニメや映画、礼儀など様々な観点から興味を持っていてくれる人がいて、今まで日本で住んでいただけでは気づけなかった日本のことを知ることができました。印象に残っていることは、日本人は考えすぎていると思ったところです。海外の人は臨機応変に生きていて、失敗しないように準備を重ねることが大切な日本とは真逆で見習わなければいけないと思いました。

(今回の経験を今後どう生かしていきたいか)

海外の人は自分が思っていたより日本のことを本気で学んでくれていて、自分自身、日本の良さに改めて気付かされました。今後の学生生活では、プログラム中の訪問先で聞いた日本語パートナーズを利用し、海外で日本語を学びたい人たちに日本の良さを伝えるとともに、新たな海外の良さを知っていき、将来は何かしらの形で日本と海外を結ぶような会社で働きたいです。

現地フィールドワークの中で、3日目にはULISの学生と共に現地探索を行いました。

その際の思い出の写真を、学生のコメントと共に、次のページにて一部紹介します。

2025 年度 異文化理解プログラム（ベトナム）
学生 渡航後レポート

～現地探索時 思い出の写真～



▲この写真は、旧市街にあるはんこのお店で、自分の名前を彫ってもらはんこを選んでいただいているところです。ULIS の学生の子が私たちの名前のベトナム表記を教えてください、はんこに彫ることが出来ました！



▲ULIS の学生がおすすめしてくれた餅米アイスです。日本にもある食材を使った日本では見たことのない食べ物だったのでとても新鮮でした。



▲一緒に行動した日の夜にみんなお揃いで買ったブレスレットです。すごく短い時間だったけどお互いの夢や人生についてみんな話してとても楽しかったです。日本とベトナムの遠距離だけどみんなお揃いのブレスレットのおかげでいつでも繋がっている気持ちになれるので宝物です。



▲ULIS の学生と昼食をとっている時の写真です。

2025 年度 異文化理解プログラム (ベトナム)
学生 渡航後レポート



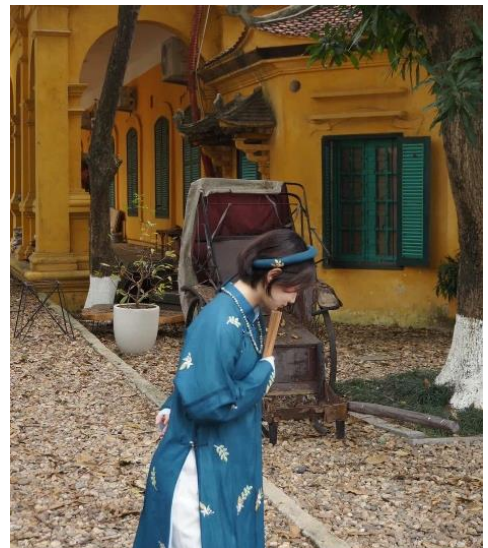
▲ハノイ旗塔にみんなで登った時のものです。



▲ULIS の学生とバインミーを食べた時の写真です。
このバインミー屋さんにはステッカーをお店に貼る文化があり、実際に私もメッセージを記入して貼りました！！



▲線路カフェに行った時の写真です。結局列車は見られませんでした・・・。



▲アオザイの写真です。私はベトナムのメイクをしてもらい、アオザイを着させてもらいました！

2025年度 異文化理解プログラム（ベトナム）
学生 渡航後レポート



▲ハノイ国家大学外国語大学（ULIS）の学生さんたちと一緒に、世界遺産である「タンロン皇城跡」を訪問しました。皆さんは日本語がとても堪能で、施設内の歴史的な解説文をその場で分かりやすく翻訳してくれました。そのおかげでベトナムの歴史に対する理解がぐっと深まり、充実した文化交流の時間となりました。



▲見学の後は、みんなでローカルレストランへ。テーブルの中央にあるのは「フォーチエンフォン」という、揚げたフォーに牛肉や野菜のあんかけをたっぷりかけたハノイの名物料理です。サクサクに揚がったお餅のようなフォーとあんかけの相性が抜群で、ボリュームも満点！現地の学生さんたちと食卓を囲み、会話も弾む楽しいお昼ごはんでした。



▲夜はベトナムのソウルフード「バインミー」を堪能しました！サクッと軽い食感のフランスパンに、お肉や野菜が挟まっています。最高の味わいです。ここは有名なお店らしく、同行したULISの学生たちも大喜び。注文時の通訳もしてくれて大変助かりました。背景の黄色い水玉模様は、実はバインミーの包装シールなんです。壁に貼っていくユニークな文化も体験できました（天井にはどうやって貼ったのでしょうか…）。美味しい食事と楽しい交流で、あっという間に幕を閉じた1日でした。



▲みんなでプリクラを撮りに行きました。青春です。

以上